

(研究指導科目)

科目名	博士研究指導Ⅲ 英語名：Directed Study Ⅲ	必修/選択	必修
		単位数	2 単位
		担当教員	専任教員

【授業概要】

博士研究指導Ⅲは、学生が教員からの個別指導を受けながら実施していく。具体的には、専門科目や基盤科目の学びと、博士研究指導Ⅰ・Ⅱで得られた成果を踏まえ、理論と実践の往還を実現するべく、実践研究として組み立て、集大成である博士論文を作成する。その際、学生は、単なる実践や単なる理論に留まらず、実践上の経験や知見（実践知）と学術的な理論・概念（理論知）を交流させた論文を作成することが意識できるよう留意し、教員はそのための指導を行っていく。論文として提示する際には、学術的な貢献はもちろんのこと、実践の現場にも伝わり、貢献ができるよう留意する。この一連の中で、学生は博士論文の草稿を提出する準備を行う。

(1 原田 公人)

研究の全体像を明確し、論文の構成や執筆内容を固め、博士論文としてまとめることを目指す。博士論文では、当該研究分野の中で研究テーマが的確に位置づけられていること、及び当該研究分野に対して独自の視点を確立し、実践や研究の発展方向（提案や指針）を認識していることが求められる。実際の論文作成に当たっては、論文テーマ、構成、章・節・パラグラフの確認を丁寧に行う。特に、研究から導き出された独自の知見の言及に際しては、テーマに足しての単なる自分の意見表明とならないためにも、推敲（客観性や妥当性を基盤とした）を重ねることを重視する。また、学生は将来にわたり、高度な実践能力や研究力をもつ専門職業人としての役割は期待される。このため、博士論文作成を通して、高い倫理観や社会貢献の精神を醸成し、修了後も実践的研究者となるべく議論を深める。

(2 細田 満和子)

1 年次、2 年次に修得した知識や技能や態度を基に、各自の教育・医療・福祉の連携論に関するテーマや病に関する社会学（医療社会学）的考察のテーマにふさわしい理論的枠組みを同定し、先行研究のレビューをし、フィールド調査に基づく結果をまとめて博士論文を仕上げしていくための教育支援を行う。その際、自身の博士論文が現場の課題を解決し共生を目指す社会に導くいかなる貢献となるのかについて、常に考えるように促す。博士研究指導Ⅱに続いて関連学会への参加や学術雑誌への投稿を目指す指導や、修了後も実践的研究を継続できるための指導を行う。

(3 松浦 均)

博士研究指導Ⅲでは、複数の論文の公刊を目指す。この時点で考えるべきことは、各自の研究のストーリー性とそのオリジナリティについての確認および各自のリサーチクエストに対するアンサーが確実に得られているかどうかである。そしてその成果は今後どのような展望を描けるものなのか、そういったことを常に考えながら博士学位論文を完成させていく。自分の研究を大事にする姿勢は当然として、同時に、その研究が社会に対して、現場に対して、次世代の人たちに対して、問題解決・課題解決に資する広く新しい知見になっているかどうかも重要なことである。学位論文として、実践と理論が融合しているか、すなわち個別的視点と普遍的視点の整合性についても最終的な確認も行う。

(4 芳川 玲子)

博士研究指導Ⅲでは、博士指導Ⅱで積み上げた研究を博士論文として仕上げる。博士論文は自分自身のためのものであると同時に、社会のため、科学進歩のためのものである。自分の研究の社会的意義をだいにしつつ、社会的な視点、学術的な視点、オリジナリティを再度確認しながら、考察を深めていく。また、独善的な論文にならないためには、発表会でのディスカッションや論文

査読者との丁寧なコミュニケーションを繰り返すことが大切である。さまざまな視点のコメントを大切に検討しながら、作成の指導を行う。

(5 土岐 玲奈 副指導のみ)

章構成案に従って執筆を進めながら、一方では職業人としての経験に関する「自己省察」をさらに深めるとともに、他方では研究テーマ・目的・方法をいっそう明確化する。さらに独自の「関与観察」から得られたデータを再検討して考察を深め、研究目的に沿った結論を得られているかについて確認しつつ、章構成を修正する。そして、学校教育や教職実践についてオリジナルな解明と問題解決に向けた処方箋が提起できているかどうかを再度点検しながら、博士論文の草稿を完成させ、さらに推敲を重ねる。

以上のプロセスで習得した「探究」の姿勢を常に保持し、問題発見、問題解明、問題解決の具体策化を職業生活のなかで将来的にも持続していくことを何度も確認する。

(6 古壕 典洋 副指導のみ)

専門職としての取り組みをもとに、教育実践を省察的に探究することや、生涯学習・職能開発の観点から焦点化したテーマについて、博士論文の執筆を行う。核となるひとつの論文または複数の個別論文を土台に、①実践の省察の考え方に基づきながら、研究テーマや目的、研究法、調査等の研究の実施と分析、考察、成果と課題などの項目を吟味し省察して博士論文にまとめる。②特に、「考察」と「成果と課題」では、論文の独自性として、一般化や汎用性のみならず、専門職である自身と他者にとって実存的そして省察的な「考察」や「成果と課題」となるよう共同探究を行う。

【キーワード】

実践と理論の往還、現場に活かせる研究の考察と結論の提示、実践現場と学術への貢献、博士論文執筆、予備審査、本審査

【授業の到達目標】

学年を通じて以下の点を求める。

1. 実践と理論の往還を実現するべく、結果に関して現場に活かせるような考察・結論・提言の検討を行う。
2. 個人から社会システムまでの広い視野を持って博士論文を執筆していく。
3. 博士論文の執筆を行いながら、その成果を現場に還元していくことを目指す。

学年末の時点で以下の点を求める。

4. 博士論文を提示する中で、実践現場と学術界の両方への貢献を行うことができる。
5. 博士論文の審査基準に沿った博士論文の構想を準備し、実践と理論の往還について構想内に示すとともに、プレゼンテーションを通じて情報発信ができる。
6. 研究成果自身を現場に還元していき、研究で身につけた諸能力を実践現場で活用していける力を持つ。

【教育の方法】

スクーリングの実施【あり】 スクーリングのメディア受講【可】

【授業計画】

本科目は、教員の個別指導と学生の成果発表、それに合わせた事前・事後の学修からなる。

1) 第一段階

予備審査の準備段階の指導では、①理論と実践の往還を実現した内容となっているか、②個人から社会システムまでを含む包括的な視点で考えているかについて論文指導を行い、合わせて、研究内容を実践現場の人間にもわかりやすく伝えるためのプレゼンテーションや言葉選びの工夫についても指導していく。

2) 第二段階

第一段階を経て、予備審査に合格している学生は、さらに精緻化した論文の原稿を作成する。教員は、予備審査の指導で留意した点のうち、学生が不十分である点を中心に、指導を行っていく。

その上で、学生は本審査を受ける。なお予備審査論文の提出に至らない学生に対しては、引き続き

論文作成に向けての指導を継続する。第三段階には進めない。

3) 第三段階

本審査合格後には、修了後の論文公表と、合格後の公開発表会に向けた準備を行う。教員は、学生が実践現場や異分野の人にも伝わる発表ができるよう、さらに指導を行っていく。その際、教員は、多様な発表機会や、研究で得らえた知見を活かす機会を学生とともに模索していく。

【履修にあたっての準備・履修上の注意点】

本科目の履修にあたっては、博士研究指導Ⅰ・Ⅱの中で一定の実践を行い、成果を査読付き論文等でまとめていることが求められる。

【スクーリングでの学修内容】

研究指導教員と学生の合意形成のもと日時を設定し、定期的に研究指導を行う。個別指導にあたっては、学生は事前にその時点での課題を整理したうえで指導を受け、指導後は、指導の中で学んだことの報告を行うこととする。

【評価方法】

博士論文予備審査・本審査を経た学生にあっては、プレゼンテーション、提出された論文、口述試験について、博士論文の審査の観点に基づいたルーブリックを基に評価を行う。また、本授業を履修する年度において予備審査論文を提出していない学生、予備審査に合格しているが本審査論文を提出していない学生にあっては、提出された査読付き論文等の業績をもとに評価を行う。

備考：在学期間中に博士学位論文の提出ができない者においては、本授業の単位認定がなされた場合は、単位取得満期退学を認めるものとする。

【テキスト】

授業開始後に、研究指導教員ごとに個別に学生に提示する

【参考図書】

授業開始後に、研究指導教員ごとに個別に学生に提示する